

さて今日は降臨節第2主日で、バイブルサンデー、聖書の日曜日と呼ばれる日です。降臨節第2主日の特祷は、イギリスの聖公会の祈禱書では、聖書のこと強調されたお祈りでした。それで、聖公会に限らず、世界のキリスト教会は、この日曜日を、聖書の日曜日に行っているのです。日本聖公会でも文語の祈禱書では聖書のことを祈る特祷でしたが、現在の祈禱書では、134ページの44番の祈り。『聖書を読む前の祈り』という形で残っているだけです。

聖書について話したい理由は、今日最初に読んだ聖書が、バルク書という、聞きなれない書物だったからです。バルク書は、旧約聖書の中にはありません。旧約聖書続編という旧約と新約の間に入れられた書物のひとつです。

それでは、そもそも旧約聖書続編とは、何なのでしょう？以前の口語訳聖書では入っていなかった旧約聖書続編が、聖書の中に組み入れられたのは、どうしてなのでしょう。

まず、言えることは、以前の口語訳聖書は、プロテスタント教会だけで使われていたものです。カトリックは別の、バルバロ訳聖書というのをそれまでは使っていました。新共同訳聖書で、初めてカトリックとプロテスタントと一緒に翻訳をしたのですが、カトリックでは、最初から、今日のバルク書などの書物も聖書として読んでいたのです。しかも、「旧約聖書」と「旧約聖書続編」という分け方はしないで、両方を含めて「旧約聖書」でした。それじゃ、どうして、こんな違いができてきたのでしょうか？

旧約聖書というのは、元々はヘブライ語という、右から左に読んでゆく言葉で書かれていました。ところが、イエス様が生まれる600年くらい前、ユダヤの国は東の国バビロニアによって滅ぼされ、都のバビロンへ連れて行かれました。50年後には、またその国の都バビロンから帰ってきて、神殿が再建され、聖書も編纂されるようになるのですが、イスラエルに帰って来ないで、バビロニアとか、エジプトとか、そのほかの地中海沿岸などの町にも、ユダヤ人はあちこち散らばって住むようになります。

ユダヤ人にふたつのグループができたのです。イスラエルに帰ってきたユダヤ人たちは、ヘブライ語を話しますから、聖書もヘブライ語で書かれていました。しかし、バビロニアやエジプトなど、外国に住む人たちは、宗教的な生活習慣はユダヤの伝統を守っていましたが、それぞれ外国で生活しているので、その土地の人々の言葉をお話しなければ、生きてゆけません。

そこで、もうヘブライ語をお話せないユダヤ人が増えてきました。その時代、広く普及していたギリシャ語をそんなユダヤ人は話すようになったのです。そこで、聖書もギリシャ語に翻訳する作業が進みました。ところが、元のヘブライ語聖書というのは、1冊にまとまっていたわけではありません。たくさんの巻物に分けられていたのです。しかも印刷技術などありませんから、手書きで書き写す、という作業をしていると、ヘブライ語の聖書にも、ギリシャ語の聖書にも、いろんな種類ができてきました。

たとえば、旧約聖書には、エステル記という面白い物語が入っていますが、旧約聖書の続編にもエステル記ギリシャ語というのが入っていて、こちらの方が6ページくらい長いんです。

そしてお話を劇的に盛り上げているような内容です。目次だけ見たら、どちらも10章でできているように見えますが、続編のエステル記には、A B C D E Fという、6つの章のような部分があちこちに入り込んでいるんです。

そんなふうに、ユダヤ教の中でも、ヘブライ語聖書とギリシャ語聖書とは、別の歩みをしていました。

そのうちに、もうイエス様が十字架にかかった後ですが、エルサレムの神殿が壊されて、ユダヤ人の信仰を一致させるものは、神殿ではなく、聖書による信仰の統一が必要ということになりました。

そこで、イスラエルの西の海岸ヤムニアという町に、紀元90年頃、つまりイエス様の十字架から60年過ぎた頃ですが、ユダヤ教のラビたちが集まって、自分たちユダヤ教の聖書はどれを正典にするか、決めました。その時に決定した正典が39巻。これがわたしたちの持っている旧約聖書です。

ところが、その頃には、外国に住むユダヤ人のために翻訳されていたギリシャ語の旧約聖書を、キリスト教会も読むようになっていて、これは、ヘブライ語の旧約聖書より数が多かったのです。

ですから、キリスト教会は、続編のついた旧約聖書をずっと読み続けてきていました。もちろんキリスト教はその他に、新約聖書も読んでいたわけですが。

ところが、16世紀の宗教改革の時、マルチン・ルターという、ルーテル教会を設立した学者は、旧約聖書というのは、元々ヘブライ語で書かれている。ヘブライ語聖書だけが、正式な旧約聖書だ、と主張して、それまでカトリック教会が使っていた旧約聖書の数を減らしてしまった、とされています。

カトリック教会は今でも、それまで使っていた、続編を含む書物全体が旧約聖書だと考えています。ですから、2013年2月に発行されたフランシスコ会の聖書を見ると、今日の最初に読んだバルク書も含めて、それらは旧約聖書に入っています。プロテスタントは39巻が旧約聖書で新約の27巻を足して、66巻だけが正典だと言い、カトリックは続編を含めて正典だと言います。

それでは、わたしたち聖公会はどのような立場なのでしょう。どうして続編を礼拝で読むのでしょうか？

聖公会が、カトリックから独立して、独自の立場を明らかにした文書があります。英国聖公会の39か条と呼ばれるもので、「聖公会大綱」とも言います。この39か条の第6条「救いのために聖書は完全であることについて」という文章の中で、次のように言っています。

『聖書は救いに必要なすべての事柄を載せている。したがって、聖書の中に書かれていないこと、あるいは聖書によって証明されないことは、信仰箇条として信ぜられるべきもの、あるいは救いに必要不可欠と考えられるべきものとして何人にも要求されてはならない。聖書とは、教会においてこれまでその権威が疑われることのなかった旧約と新約の経典のことである。』

このように聖書を、他のプロテスタント教会と同じように認めたあとで、続編について、語っています。

『教会は次の諸書を(ヒエロニムスが述べているように)生活上の模範と道徳上の教訓のために読むが、それらを根拠としていかなる教義をも定めることはしない。』

「生活上の規範と道徳上の教訓のために読む」という積極的な表現と、「それらを根拠としていかなる教義をも定めることはしない。」という否定的な表現もあります。

それで、今日は、旧約聖書続編の中から、シラ書という、書物に書かれた言葉を紹介して、私たちがどのようにこれらの中途半端に思える書物を受け取るべきか、考えましょう。

シラ書には、第1章の前に序言という前置きがあります。そこに大切な表現が出てきます。

『◆序言 1-2:律法の書と預言者の書およびその後に書かれた他の書物は、我々に多くの貴重な教えを残してくれているが、3:そこに述べられている教訓と知恵のゆえに、我々はイスラエルをほめたたえるべきである。』

「律法の書と預言者の書およびその後に書かれた他の書物」というのが、プロテスタントの言う、いわゆる旧約聖書全体を指すと思われます。そのすばらしさを著者は先ずほめたたえています。しかし、それだけでは満足していないことが、続きに語られます。

『4:ところで、それらを読む者は、自分自身が理解して賢くなるだけでは十分と言えない。5-6:学問を大切にする者は、また、自らも語ったり書いたりして、一般の人々の役に立ちうる人でなければならない。』

読んで、自分が満足するだけでなく、自分自身も後世の人々のために書き残す必要を感じているのです。

『7-10:わたしの祖父イエスは、長年、律法の書と預言者の書と先祖たちの他の書物を読むことに専念した。11:そして十分習熟した後、12:教訓と知恵に関する書物を自分も書く気になった。13:それは、学問を大切にする人たちが、その教訓と知恵をしっかりと把握して、14:なおいっそう律法に適った生活ができるようになるためである。』

聖書の言葉をただ、読むだけではなく、そこから自らが発見したことを、後世の人々に伝えるために、このような続編が存在してきたということです。聖書によって生きた人々の証言を読むものとして、これを読んでいただきたいのです。

そして、わたしたちも聖書から学んだことを自分の言葉で語ることをしてはどうでしょうか。

聖公会は、旧約聖書続編を「生活上の規範と道徳上の教訓のために読む」わけですが、そのような文章を書けるように、いつも感想を持ちながら読んでゆく姿勢が必要のように思います。

聖書の日曜日に当たり、わたしたちがもっと聖書を身近に感じるものでありたいと思います。